
作った、世界は

菜風 龍鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作った、世界は

【Nコード】

N6044Y

【作者名】

菜風 龍鬼

【あらすじ】

『ナマエヲクダサイ』

そして手に入れた名前は”—————”

僕はその名前を使って、”自身のセカイ”で暮らす。

だけど、友達になった人たちはいつも一緒にいてくれない、

だから僕は、友達達を”
—
—
—
—
—
—
”した
した

はじまり

さあ、いらっしやい、ボクの世界へ。

痛みも悲しみも苦しみも無い”ボク”の世界へ・・・

— — —
— — —
— — —
— — —

—

”目が覚めたら”周りは何も無かった。

目が覚めた？

1人の人間は何も無いトコロにたっていた。

「ココは・・・？」

1人の人間は何も無い白い空間を見渡す。

「誰かいませんかー。」

ちよつと呼びかけてみる。

だが返答はない。

「ん？」

”返事は”無かったけど、何も無いと思われてた空間に何かが落ちていた。

1人の人間はそれを拾う。

それは本のようにだった。表紙には名前を記入する場所があり

中には何もかかれてない白紙の紙があった。

そして最後にペンが挟まってた、1枚の紙と一緒に。

そこにはこう書かれていた。

『君の名前を書けば、君だけのストーリーが始まる』

1人の人間はペンの蓋を開けて表紙をみた。

「ここか・・・」

そして名前を書こうとして1つの疑問を覚える。

「・・・ナマエ? そうだ、”ボク”のナマエは?」

1人の人間は、頭を抱えて悩んだ。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

—
—
—
—
—
—
—

—
—
—
—

本とペンと1枚の紙しかない空間に滞在して何時間たったであろうか

いや

何年、何百年たったある日。

「そうだ」

1人の人間はペンを持ち、本にこう書いた。

『ナマエヲクダサイ』

「話」はじめまして 僕の名前は”——————————”」

本がパラパラと開かれ、”世界”の構成が始まる。

〓始まりの都市 〓トイ・マラン〓〓

白い空間に景色が作り出され、建物が作り出される。

そして1人の人間の空からは1枚の紙が落ちてきた。

■ステータス

【名前】菜風 龍鬼

【タイプ】旅人

【LV】 1 1 0

【STAB】 2

【HACK】 1 1 4

【INT】 1

【DEF】 1 0 3

【MR】 2

DEX	AGI	HP	MP	SP
61	64	6291	688	6084

「・・・・・・チートすぎるだろ」

- ・ 龍鬼はむかつて紙を半分に破くとちようど数値のところが破け・・・

ステータス	名前	菜風	龍鬼
LV	タイプ	旅人	
2	11		
2	45		
1	1		
103			
2			

[illegible]

暖かい明かりが降り注ぐ

そう、ここは始まりの町トイ・マラン

龍鬼が2番目に好きな町。

中央にあるきれいな泉付近には初心者が初めてINするとそこへたどりつく。

泉をじっと見ていると、また初心者が来るのか、キャラクターが転送されてくる。

ただし、泉の上。

龍鬼は立ち上がり、ほんの気まぐれで泉に落下を助けてやろうと足に”力”をためる。

「おしっ」

ちょっと助走をつけて泉に向かって走り、飛ぶ。

がしつといい手ごたえと、水しぶき。

「ほら、君大丈夫かい？」

龍鬼が片手に持っていた・・・

「小銭袋・・・？」

「・・・ド・・・」

後ろから声がする

「ド？」

後ろを向くと泉に落っこちた、初心者が俺をみてアワアワと震えている

「泥棒ー！」

「フギャッ」

龍鬼は初心者に水をかけられまくりびしょびしょ

「ちよっ、金は返すから水はやめてっ水はっ」

龍鬼がそう叫べば水しぶきはとまる。

「あーっ、びしょびしょじゃねーか」

龍鬼が半分苛立ちながら言う。と泉から出てきた初心者と言う

「お前が悪いんだから、いきなり小銭は盗むし、少ししか入ってないんだから返せっ」

「だから盗んでねーって」

龍鬼は手をだしてあがるのを手伝おう・・・と

「っけっ ドロボーが」

手をはたかれた。

「・・・チツ、ドロボーじゃねえよ、 菜風 龍鬼だ。新人。」

そういつて龍鬼はもう一回手を出す

「新人ちがう、真下だよ」

その手をとった真下。

「んじゃ、お詫びもかねて、フレンド登録でもー」

龍鬼はスキルを使おうと指を鳴らす。

「だがことわっぶはっ」

真下、しゃべっていたら、下から熱風が。

「あーしゃべると嘸むぞ」

そういう龍鬼も手から熱風を出していた。

「・・・なんか凄い人に捕まった予感」

真下がそうボソツというとき龍鬼は風を止めて言った

「・・・今頃気がついた？」

そういつて龍鬼は笑いかけた。

（・・・あー・・・ このゲーム買うんじゃないかった）

「そだ、真下っ」

龍鬼が思い出したと手をたたきつつ言った

「狩いかない？」

「しょうがないな」

真下はそういうとエリアへと走っていった。

「あー、はえー・・・w」

龍鬼も遅れながらついていくと・・・！

2話「初めての友達。」

別れ、そして見つけた“データの山”

「うっわ、スライムの大量発生イベント中だっけ」

龍鬼は青い塊を持ちながら言った。

「わー、何この子かわいい」

真下はスライムの中から大量発生のバグらしい黒いペンギン（死んだ眼をしている）子を発見した。

「・・・ペットにするかい？」

「・・・っ！」

真下の反応を見て教えてやった。

「その子さ、この付近のレアモンスターだよ、名前はないけどその子に主登録すればほかの子に取られないし殺されることはない」

龍鬼がペットの話をしていると真下と黒い塊はなにかぶつぶついていた

「スイカペンギン」

「ペー！」

「・・・はー、登録しちゃったか」

龍鬼はため息をしながら真下の頭をぽんぽんたたく。

「は？」

「ああ、ペットに名前をつけることが”主登録”だよ」

「簡潔でよろしい」

「ペー！」

「あれ、何か立場変わってない？、なんかスイカペンギンとの相性よくねっ？　なんかスイカペンギン刀もって俺の方に歩いてくるしっ！？」

龍鬼はスライム達の隙間を走っていく。

「行けっ、スイカペンギン」

「っペー！」

スライムを気にしないで走り抜けるスイカペンギンは刀を抜き、龍鬼をおいかける

「あ」

「ぺっ？」

真下がそういうとスイカペンギンは動きを止めた、龍鬼も同時に止める

「ん？、どうした」

「いや、そろそろ寝ないと」

真下はそういうと”バイバイ” と言って消えた

「・・・・・・・・・・帰ったか」

龍鬼はスライムをつかんだ。

「近くの町でも行くか・・・」

龍鬼はさっきよりも暗い表情で歩いていくと看板がみえた

「カルデア・・・行ってみるか」

ちょっと歩くと目の前には”クズデータ”の塊と“バグデータ”の塊があった。

「・・・・・・・・君」

龍鬼の足元には淡い青色の明かりがある

「NPCになり損ねた子か・・・」

龍鬼はデータを改変して”町を作り上げる”

そしてある小屋に淡い青い明かりとともに入り、バグデータと合わせて”人格”と”名前”を持たせた。

そして”生まれた”子は俺を見て言った

「僕は・・・？」

「君は・・・そうだね、僕の弟」

龍鬼は床に座ってる人に語りかける

「君の名前は菜風 龍鬼」

「りゅーと・・・？」

「そうだよ、君はこの町、カルデアに住んでるの、この小屋は菜風の家。」

「僕らの家？」

「そうだよ？いつもここに帰ってくるの」

「そんなんだ・・・」

龍鬼は立ち上がり小屋を見渡す。

「龍鬼、君の記憶は・・・」

「ん？、ちゃんとあるよ 龍鬼が助けてくれた事、運営会社・・・」

捨てられたことも」

「・・・ごめん」

龍鬼はしたを向きつつ謝った

2話「初めての友達。 別れ、そして見つけた“データの山”（後書き）

次回、龍兎（NPC）として作られた時でも短編としてかこうかなとおもっています

短編「ボクの生まれたキツカケ」

「新しい町……そうだね、村……いや町がいいかも」

1人の男がp c片手にコーヒーを飲んでいる。

「そうだ、町といえばNPC」

男がカタカタとキーボードを打っていると誰かが部屋に入ってきたようだ。

「よっ、葵」

「誰かと思えば……社長……」

「はい、シャチョーさんですよー」

「あ、社長、例の町のNPCこんなのはどうでしょうか」

葵はカタンッとエンターを押す。

そうすれば画面には男のキャラクターが映る。

「……外見はいいね」

社長がそういったかと思えば、画面に「エラーの文字」

「なっ!？」

葵がイスに座り直し、エラーを解除していく

「消えろ、消えてくれ」

はじめはエラーを消す速度が早かったが・・・

「なっ」

次の瞬間、画面いっぱいのエラーの文字。

「・・・葵」

社長がそういえば葵は動きを止めて少し考え、手はパソコンのコンセントを持っていた。

「・・・ごめん」

次の瞬間パソコンの画面が真っ暗になった。

「次はバグなんて作らないようにたのむよ」

社長はそういうとあきれた顔をして去っていく

「・・・ハイ」

葵はイスに座りなおし頭を抱えた。

「くっそ・・・っ」

もう一回パソコンをつけると町のデータとNPCのデータを消した。

短編「ボクの生まれたキツカケ」(後書き)

龍兎はこうして作られていた・・・
が葵の手によって消され、あ
のエリアへと流れ着いた。

短編B「それは、復讐のつもりで・・・」(前書き)

短編の続き、龍鬼サイド

短編B「それは、復讐のつもりで・・・」

このごろ、夜あ的小屋へとあしを運ぶと必ず魘されてる龍鬼をみる

「これも、アイツのせいだ・・・」

龍鬼は装備をすべて小屋に置き体のデータを崩し、どこかへと消える。

(・・・アイツ、製作者に復讐してやる・・・)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

一方葵はあの会社をやめ、自宅でパソコンをいじって、自分が勤めていたオンラインゲームを見ている。

「・・・・・・はあ・・・」

そんな姿をパソコンの“内側”から見ていた龍鬼。

「・・・お前も居場所をなくしたか・・・」

龍鬼は葵の姿を見ると“昔の自分を思い出した”

すっと画面に文字を出す。

オマエ ハ コノ セカイ ヲ

ステラレルカ？

YES／NO

迷いつつカーソルが動き出す。

それはイエスをさして・・・

「そっか・・・なら助けてあげるよ」

龍鬼の目には怒りの色は消え去っていた。

龍鬼は手を前に出すと淡い光が画面から流れてきて・・・ 形を作る

「やあ、葵」

姿をすべて作り出されると龍鬼は話しかける

「・・・・・・・・それは、俺のことでしょうか？」

目をパチパチさせた葵は周りを見渡して一言

「君は葵、ボクの町の一員さ」

短編B 「それは、復讐のつもりで・・・」 (後書き)

カルデアの町の一員となった葵・・・次回は葵、カルデアに降り立つかな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6044y/>

作った、世界は

2011年11月18日22時23分発行